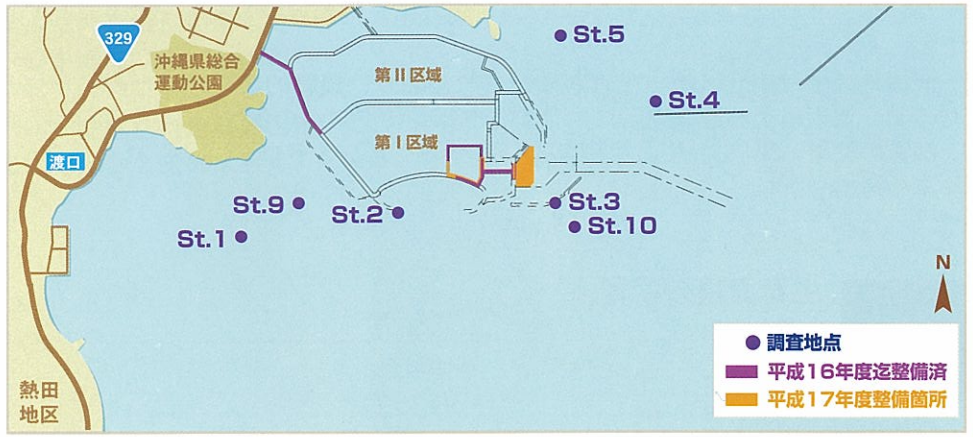
海藻草類

工事地域周辺には熱帯性の大型海草が生育し広域的に海草藻場を形成しています。このため工事による周辺の藻場への影響について監視しています。

アマモ類を中心とした大型海草藻場は、平成13年頃から減少してきていますが、この傾向は工事区域から離れた熱田地区や津堅地区などでも見られており、広域的な環境の変化と考えられます。

また、海草藻場生育箇所を詳細に調査した結果、海草の生えている底質ごと削り取られているところが多く見られることから、原因の一つとしては、台風による大きな波浪による影響が考えられます。

なお、海草の生育面積は減少していますが、ガラモ場の生育面積は増加傾向にあります。



■監視調査位置図（海藻草類）

海草藻場生育被度一覧表（１０m×１０m方形枠内）

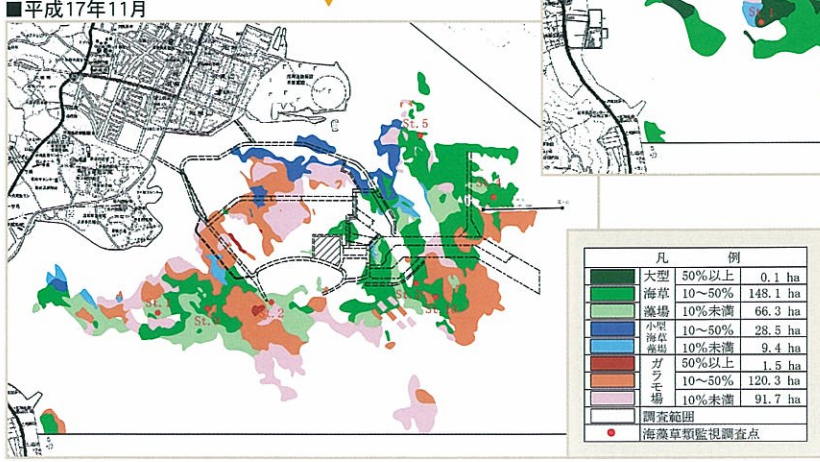
調査地点＼調査年度	平成12年度		平成13年度		平成14年度		平成15年度		平成16年度		平成17年度		事前の変動範囲（平成12年夏～平成14年夏）
	夏	冬	夏	冬	夏	冬	夏	冬	夏	冬	夏	冬	
St.1 C.D.L-0.8m～-1.0m	70%	65%	70%	40%	+	+	+	+	+	+	+	+	+～70%
St.2 C.D.L-2.5m～-2.7m	65%	60%	55%	40%	40%	30%	20%	20%	15%	10%	15%	10%	40～65%
St.3 C.D.L-0.6m～-1.1m	85%	80%	75%	75%	75%	65%	65%	50%	25%	15%	10%	5%	75～85%
St.4 C.D.L-0.6m～-0.7m	75%	60%	70%	65%	60%	60%	50%	45%	25%	25%	30%	20%	60～75%
St.5 C.D.L-0.5m～-0.8m	60%	70%	75%	75%	70%	70%	70%	70%	60%	40%	45%	35%	60～75%
St.9（補助地点）	－	－	－	－	－	－	40%	40%	30%	20%	20%	15%	－
St.10（補助地点）	－	－	－	－	－	－	40%	40%	20%	10%	5%	5%	－

注）１．表中の「＋」は被度5%未満を示し、また、被度表示は5%単位で表示しています。
２．表中の「C.D.L」は、海図基本基準面を示し、目安として大潮時の平均干潮面が０m程度です。

被度：地表面（海底面）を覆っている度合いを言います。例えば海底面のある区画半分を海草が覆っていた場合、その海草の被度は50%となります。
被度は、海藻草類、植物やサンゴなどの調査で良く用いられます。

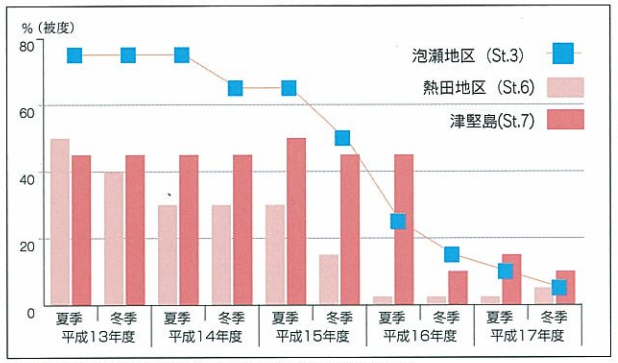
■平成13年11月

■平成17年11月

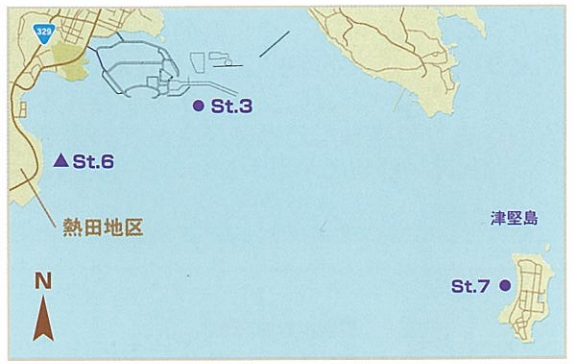


広域的な環境変化は？

工事地区から遠く離れた熱田地区、津堅地区においても同様に海草の被度が減少しており、海草の被度の低下は広域的に行っています。



熱田地区の平成16年度及び平成17年度の夏季調査では被度5%未満。

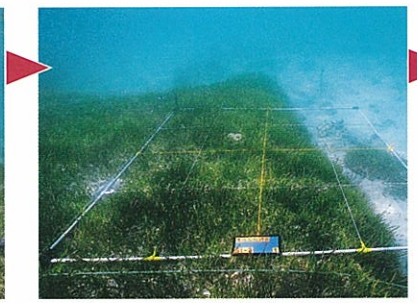


原因は、台風等の波浪か？

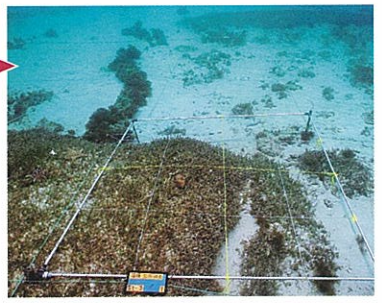
平成14～16年にかけて、藻場面積が大きく低下しましたが、その間は、沖縄本島周辺に例年の２倍近い6～７個の台風が来襲しています。

平成16年10月には、過去最大の波高を観測する台風23号が来襲しており、台風前後で藻場の状況を見てみると、底質ごと削りとられていることが確認されました。

St.3の藻場の状況　平成16年1月撮影



平成16年8月撮影



平成17年1月撮影

ここに注目!!

海藻と海草の違い

海に生えている植物は、大きく分けると「海藻」と「海草」の２種類に分けられます。「海藻」はワカメやコンブ、ヒジキ、ホンダワラなど花は咲かずに胞子によって繁殖する仲間です。このうちホンダワラ類で形成される藻場を通称「ガラモ場」と呼んでおり、泡瀬海域でも近年増加傾向にあります。一般に海藻は波当たりの強い岩礁地帯に多く生育しています。一方、「海草」は陸上の植物と同じく、根から養分を吸い、花を咲かせ種を実らせ、種子や根の広がりによって繁殖する仲間です。海草はさらにリュウキュウスガモやリュウキュウアマモといった大型海草と、ウミジグサやウミヒルモ類などの小型海草に分けられます。一般に、海草は、波当たりの弱い内湾の砂泥底に多く生育しています。

ヤツマタモク（ホンダワラ類）ー海藻

リュウキュウスガモ（アマモ類）ー海草